



木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233
E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j



木二中 学校だより 令和7年11月25日
No.28/113 校長 山元 竜二

二兎を追ってもいいじゃないか

先月21日まであるファストフード店が、全国の店舗で2週間限定の特別メニューを販売しましたが、その販売期間に先立つ10月7日から新TV-CM「二兎を追ってもいいじゃないか。」篇が全国でオンエアされました。「タラッタッター」で有名なCMなので、見た人も多くいるかと思えます。

そのTV-CMは、「人生A」、「人生B」という人生の岐路に立たされて悩む女性に、同店アンバサダーを務める俳優が力強いエールを送るというストーリー。その女性とは、あるアイドルグループに所属するタレントでもあり、また、芸術家を目指す美大生でもあるIさん。以下がそのTV-CMの台詞でした。

行きたい道が2つあると聞く。片方を選ぶということは、片方を諦めるということ？(え?)

両方の道、行ってみればいい。(両方?)

二兎を追う者は一兎も得ず。そんな常識、君が壊しちゃえよ。二兎を追ってもいいじゃないか。

私はこのTV-CMをただ何となく見ていましたが、何度も見るうちにある偉人の言葉を思い出しました。

**今までの常識を無視しようとする人。
周囲から止められても、なかなか諦めようとしない人。
それ以外は全員、並の人です。**

歴史に名を刻む偉人の言葉となりますが、木二中生の皆さん、左記の言葉を残したのは誰だと思えますか？中学生で言い当てられたらすごい。

吉田松陰です。過去の学校だよりも吉田松陰は

登場しています。(令和6年度学校だより PROLOGUE No. 17)

天才思想家であり、教育者であり、そしてまた誰よりも冷静な戦略家でもあり、兵法の専門家でもあった吉田松陰ですが、1853年、黒船が来航した際に一人、舟を盗んで黒船へ。

「今の日本では、西洋を敵視しても勝てっこない。ならば西洋のやり方を学ぼうじゃないか。」

そんな時はいつもろくに計画も立てずに行動にうつしていたとか。思い立ったらすぐ行動。その行動に「常識」なんか関係なし。私が読んだ書籍にそのように記されています。(池田貴将著「覚悟の磨き方」～不安と生きるが理想に死ぬか～超訳 吉田松陰)

そもそも、「常識」とは、ある社会や時代において、人々が当然のこととして共有している知識、判断力、行動の基準を指します。これは「社会通念(しゃかいつうねん)」とも呼ばれるものでもある。(AI回答)では、「常識」は不変か？という、「ある社会や時代において…」とあるので、時代や組織、社会そのものが変化すれば、知識や判断力、行動の基準だって変化するのが当たり前。かつては「常識だ」と言われていたことが現在はそうでないなんていうことはたくさんあるし、その逆だってある。様々な物や事象に対する人々の価値観だって変化するように、「常識」だって時代背景や社会情勢によっていろいろと変化するものだし、変化しなければ進歩だってないかもしれない。ましてや「常識」が「挑戦」の足かせになることもあると私は思います。

その「常識」をことごとく打ち破り、前人未踏の領域に足を踏み入れている日本人がいますね。ロサンゼルスドジャースの大谷翔平選手です。これまで投手と野手の両方をこなすいわゆる2way player(二刀流)は存在していましたが、彼の記録は桁違い。日本ハム球団にプロ入りする際には、ほぼすべての野球解説者に投手、野手どちらかに絞ったほうがいい(それが野球界の常識)と言われていましたが、結果はどうでしょう？彼の可能性を信じた指導者(栗山監督)に出会えたということも彼の人生には大きかったことでしょう。多くの大人たちが、「常識」という大義を振りかざして、1人の若者の未知なる可能性の芽を摘んでいたら…と考えるとこの上なく恐ろしいと思いませんか？メジャーリーガー大谷翔平は、この世に存在していなかったかもしれないなんて…。

大谷選手に比べたら遙かに、本当に遙かにスケールが小さい話になりますが、かく言う私も「常識」ではあり得ない人生を歩んできたと自負しています。

ちょうど今から43年前の11月、公立高校を1年で中途退学し、高校生活も野球人生も「詰んで」しまった私は、自暴自棄にもなり荒れた生活を送っていました。しかし、かけがえのない仲間と心の底から信頼できる指導者(故小枝 守[こえだ まもる]元拓大紅陵野球部監督 2016-2017 侍JAPAN U-18監督)との出会いによって「詰んだ」はずの人生が改めて動き出すことに。当時の「常識」ではあり得なかった高等学校再入学。1つ年下と同学年になることを覚悟の上、意を決して再入学、辛い日々もありましたが、終わってみれば千葉県では9年ぶりの春夏連続甲子園出場。(詳しくは令和5年度学校だより INSIDE-OUT No. 02参照)

教員生活だって順風満帆ではありませんでした。教員として母校に戻り、1992年夏の甲子園準優勝、1996年春の選抜甲子園出場を経験させていただいた後に、自らの可能性を疑って私立高校を退職したのが2005年。公立中学校の教員に採用された2008年には42歳になっていました。教員採用試験に年齢制限が廃止された初年度とはいえ、42歳での新任教員は、当時、常識では考えられなかった存在でした。そして公立中学校16年目に校長としてこの木更津第二中学校に着任し、現在に至っています。

亡くなられた小枝先生には、会う度に私の数奇な人生に「本当にお前という奴はなあ…。」とため息交じりに、それでいながら嬉しそうに、また優しく苦笑され、私も「はい、山元竜二は二度死んでます。」と笑い合ったものです。

10月から高校入試を控えた3年生と校長室で面接をしています。必ず1人1人に将来の夢を聞いています。校長先生との面接を終えた生徒の皆さんは、「そう言えば聞かれたかも。」と思っていることでしょうか。以前、3年生の担任をしていた時もそうですが、私は生徒が語る夢や将来希望する職種を絶対に否定しません。仮に「総理大臣になりたい。」とか、「宇宙飛行士になりたい。」と言い出した生徒がいても、それを決して否定したりはしません。「常識で物事を考えろ。」とか「〇〇と考えるのが常識じゃないのか?」、ましてや、「高校に行ってもどんな努力したって常識から考えてそれは無理だよ。」だなんて、何があってもどんな理由があろうとも絶対に言いません。生徒が持つ無限の可能性を否定することは、その生徒の人格をも否定することと同じだと考えているからです。(「奮起を促すため」だなんて人格を否定する言葉を口にした人間の単なる無責任な言い訳)

3年生たち、覚えているかなあ?、君たちが校長室で「夢」を語った後、私は必ず「お家の人はその夢を知っている?その夢に対して何て言っている?」と応えました。ほぼ全員が「応援してくれています。」とか、「やりたいように、思うように挑戦しなさいと言われていました。」でした。

「ご理解のある保護者で良かったね、その分、夢に向かって頑張らないと、だね。」あるいは、「その夢を叶えるには今の自分に何が足りないかな?」とか、「足りないものを補うにはどんな努力がこれから必要になるかな?」と自分自身の足下を冷静に見つめ直し、その夢に向かって自分がこれからどうあるべきかを共に考えましたね。

私がなぜそのような考えに至ったかという、前述の恩師との出会いに遡ります。公立高校を中途退学し再入学する前にお会いした時、私は恩師に次のように言われました。

「君の過去は問わない。これから一緒に頑張ろう。」とただ、それだけ。それ以上何も聞かれない。

そして、過年度生として卒業し、教員を目指すことになった時には、「いいか、お前は、人がやらないことをやろうとしているんだ。人より時間がかかったっていいじゃないか。」と涙ながらに、そして最後には「よく頑張ったな。」と。

「人がやらないこと＝常識では考えられないこと」、つまり、まさに「そんな常識、お前が壊しちゃえよ。」と同じではないかと。本当に背中を押され続けた3年間だったなあ。

1・2年生の皆さんにもぜひ考えてもらいたい。入試を控えた3年生たちとの面談、そのほとんどが考えていないようで実はみんなしっかり考えていると校長先生はとても感心しています。「〇〇になりたい。」「〇〇に一生携わることが夢。」「私が〇〇することで人々を笑顔にできるようなそんな存在になりたい。」など。

皆さんが思い描く夢や希望に「常識バイアス」なんかかけるな。将来なりたい自分があるのなら、常識なんか無視していい。そんな常識、君が壊しちゃえ。二兎を追ったっていいじゃないか。